



# 隊商の護衛

**開始条件:** レベル5のサンキーパー

**目的:** 敵の全滅

## 序幕:

グルームヘイヴンでは平穏な日々が続いていたが、助けを求める者がいないか、常に目を光らせていた。そんなある日「極めて貴重なオーキッドの商品が《首都》方面に運ばれるため、護衛を探している」という噂を耳にした。早速この身を提供するため、汽罐区に赴く。

「ここに来る商人たちから、たくさん情報を貰っています。いま東の街道は、盗賊の出没で大混乱のようです」今回の仕事について尋ねると、隊商のリーダーはそう言った。「ですから、あなたを歓迎します。支払いがいかにほどであろうともね」

カネはいらないと答えと、男の目が大きく見開かれた。欲しいのは、みずからの力を証明することと、世界の悪を滅ぼすことだけなのだから。

旅支度を始めた。目的地は《首都》自体ではなかったが、刃ヶ森から充分離れた場所までは護衛しなくてはならない。支度を終え、西門に向かう。一日目は何事もなく終わった。しかし翌朝、関の声によって叩き起こされた。

「野盗の襲撃だ! 防御陣形をとれっ!」

## 特別ルール:

通常モンスターの街の衛兵を **a** の各ヘクスに1体ずつ (計6体) 配置します。すべての街の衛兵は君の仲間であり、他のタイプのモンスターの敵となります。レベルはシナリオレベルより2つ下。各ラウンドの行動順位 99 で「移動 **✖** + 0、攻撃 **✖** + 0」のアクションを実行します (君の攻撃修正カードの山を使用)。

通常モンスターの盗賊の衛兵を **b** の各ヘクスに1体ずつ (計2体) 配置します。通常モンスターの盗賊の射手を **c** の各ヘクスに1体ずつ (計2体) 配置します。上級モンスターの盗賊の衛兵を1体、ヘクス **d** に配置します。これらの全敵を倒したら、そのラウンド終了時に **1** を読んでください。



「こやつらは くれないりょだん 紅旅団の手の者に見えますなあ」護衛のひとりが言った。「きゃつらは普通、大集団で移動するんであ。ってことは、もっと多くの部隊が付近にいるってこと。オレたち移動したほうがいいですなあ」

先を目指すため、休む間もなく出立の準備を進めた。負傷し、疲労してはいるが、自分も他の護衛たちも最善を尽くし、隊商を急がせた。

緊迫した時間が延々と過ぎ、ついに何事もなく終わるように見えた。しかし一本の矢が、空を切る音とともに頭上を飛び過ぎた。北の雑木林に目をやる。アイノックスの一大戦闘集団が、こちらに向かって急接近中だった。

## 特別ルール:

君のコマを開始位置 に戻します。生き残った街の衛兵をすべて **a** の各ヘクスに戻します。どのコマをどこに戻すかは任意で決めてください。ただし、受けたダメージと状態は、そのままにしておいてください。

通常モンスターのアイノックスの衛兵を1体、ヘクス **c** に配置します。上級モンスターのアイノックスのシャーマンを1体、**d** のヘクスに配置します。上級モンスターのアイノックスの射手を1体、**e** のヘクスに配置します。さあ、新しいラウンドを開始してください。これらの全敵を倒したら、そのラウンドの終了時に **2** を読んでください。



「ここに、留まっていたはいけない!」護衛のひとりが言った。「もっと多くの敵がいるはずだ。我々は、進み続けなさい!」



どうなるかハラハラしたが、護衛に息をつかせる暇も与えないほど素早く、隊商は進み始めた。危険地帯ではあったが、しばらくは何事もなく進めるように祈る。しかし世の中そんなに甘くはない。

小さな毛むくじらの姿に気づいた。ヴァームリングだ。こちらに押し寄せてきている。再び戦闘準備をしなければならない。

## 特別ルール:

君のコマを開始位置 に戻します。生き残った街の衛兵をすべて **a** の各ヘクスに戻します。どのコマをどのマスに戻すかは任意で決めてください。ただし、受けたダメージと状態はそのままにしておいてください。

## 使用する地形タイル:





## ☀: 隊商の護衛

通常モンスターのヴァームリングの斥候を **(i)** の各ヘクスに1体ずつ（計2体）配置します。通常モンスターのヴァームリングのシャーマンを **(c)** の各ヘクスに1体ずつ（計2体）配置します。通常モンスターの洞熊を1体、ヘクス **(i)** に配置します。上級モンスターのヴァームリングの斥候を1体、ヘクス **(e)** に配置します。

### 終幕:

限界まで体力を振り絞った。何とかヴァームリングの最後の一体を倒したが、再び隊商と同行しなければならなかった。今日の虐殺体験は、今後長いあいだ心の中に残り続けるだろう。しかし今は、そんなことに気を取られている暇などない。歩けなくなる限り、先に進み続けなければならないのだ。やがて隊商とその商品はもう無事だと悟り、ようやく地面に崩れ落ちた。かの悪名高き危険地帯を通過し、無事に配達がなされたのだ。

ようやく止まり、休むことを許された隊商に囲まれ、大地の上に仰向けに横たわった。そのまま意識を失い、夢うつつのなかで視界が戻ってくると、天から降り注ぐ光で辺りは明るく照らされていた。悪に対して敢然と戦った自分に対する称賛の声が、体を暖かく満たし、疲労を取り除いてくれる。

再び目を開けたとき、だいぶ回復したと感じた。ところが胸の上に、何かずっしりしたものがある。視線を下げると、素晴らしい盾が乗せられていた。そしてそれがどこから来たのかは、誰も知らなかった。

### 報酬:

アイテム 140 番〈太陽の盾〉

